

第5次レッドデータブック：
絶滅のおそれのある日本の野生生物
The 5th Red Databook, Threatened wildlife of Japan

オオセグロカモメ

Larus schistisagus Stejneger, 1884

風間健太郎（早稲田大学）

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会 鳥類分科会



令和8（2026）年3月



特に文献内で別途指定がない限り、この文献はクリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンスの下に提供されています。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

種毎の解説を引用する場合には以下のように記述してください。

引用表示：風間健太郎，2026．オオセグロカモメ．環境省（編）第5次レッドデータブック：絶滅のおそれのある日本の野生生物，pp. 218-222．

Citation: Kazama, K., 2026. *Larus schistisagus* Stejneger, 1884. In: Ministry of the Environment, Japan (ed.), *The 5th Red Databook, Threatened wildlife of Japan*, pp. 218-222.

チドリ目 Charadriiformes カモメ科 Laridae

オオセグロカモメ

Larus schistisagus Stejneger, 1884

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) A2

基準 A: EN	基準 B: —	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
----------	---------	---------	---------	---------

A2. 過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、50%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。

【比較年】

10 年（世代時間不明）

【過去の状況】

モニタリングサイト 1000 調査の対象となっている大規模な営巣地および研究機関等により長期的な営巣数モニタリングが行われている営巣地合計 6 箇所のデータを集計した。利用可能な最新のデータから遡って約 10 年前（世代時間不明）の繁殖個体数はおよそ 5,600 と推定された。

営巣地および各地の調査時期：知床半島（2010 年）、大黒島（2012 年）、モユルリ島（2010 年）、ユルリ島（2010 年）、利尻島（2012 年）、天売島（2009 年）

【近年の状況】

上記の営巣地における利用可能な最新の繁殖個体数データを集計した。すべての営巣地において、1990 年代以降に繁殖個体数は急減しており、約 10 年前（世代時間不明）からの繁殖個体数減少率はそれぞれ 13～99%であり、6 箇所すべての営巣地を平均すると 67%であった。

営巣地および各地の調査時期：知床半島（2020 年）、大黒島（2021 年）、モユルリ島（2019 年）、ユルリ島（2019 年）、利尻島（2023 年）、天売島（2020 年）

評価分科会： 鳥類分科会

概要

かつては国内で普通に見られていた本種の、大規模な営巣地および長期的な営巣数モニタリングが行われている地点のほぼ全てにおいて、1990 年代以降に個体数の急減が生じており、2000 年代以降減少は加速している。これら主要な営巣地における 3 世代前からの繁殖個体数減少率は 65%以上と推定される。個体数減少原因とされる捕食者（ノネコ、ドブネズミ、キツネやオジロワシ）、餌資源（浮魚類）の減少、人為的攪乱は現在除去されていない、またはより深刻になっており、今後も継続的な個体数減少が予想される。

基礎情報

【形態】

大型のカモメ科で、全長 64 cm、翼長 44.2 cm、嘴峰長 56.0 mm、翼開長 1.35 m、体重 1265 g であり、オスの方がメスより大きく、体重はオス 1336 g メス 1123 g、嘴長はオス 58.4 mm メス 52.2 mm である。

【生活史】

雑食性。2～3 月に繁殖地に飛来し、4 月末から 5 月中旬に 2～3 卵を産み、25～30 日で孵化する。孵化してから 45 日以上で巣立つ。繁殖期にはイワシ類やイカナゴなどを自力で採餌するが、漁港で、又は漁船から投棄された底魚（ホッケ、メバル類、タラ類）、人間が投棄した大型魚類のアラ等もよく食べる。貝類やヒトデも食べるほか、人間の残飯も利用する。ウトウやウミネコなど他の種類の海鳥の卵やヒナも食べる。繁殖を終えると南下する個体が多い。

【生息環境】

ほとんどの個体が海岸から沿岸海上に周年生息する。人やキツネ等の捕食者が近づけない孤島、崖地、離岸防波堤、建物の屋上などで主に集団繁殖する。枯れ草など巣材を集めた巣を作る。

生息環境区分：	【陸域_海岸部】田地・畑地，湿地・湿原，河川下流域，河口域，ため池・池沼，砂浜・礫浜，海崖・岩浜・岩礁（磯），汽水域，塩沼地・塩性湿地・河口干潟，潟・汽水湖，陸封潮溜まり（アンキアライン池・洞窟） 【海域（沿岸）_潮間帯 表層】海面，干潟 【海域（外洋）_表層】海面
国土地域区分：	（4）河川・湿地地域，（5）沿岸域，（6）海洋域，（7）島嶼地域

【分布域】

主たる繁殖分布域は、沿海州、オホーツク海、カムチャツカ半島、サハリン、千島列島、北海道、本州北部の沿岸域である。越冬期は繁殖地に留まる個体と南下する個体があり、日本では北海道から関東地方で多数が、それ以南で少数が越冬する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

主要な繁殖地（100 つがい以上が営巣した）としては、北海道では利尻島、礼文島トド島、天売島、知床半島、ユルリ・モユルリ島、大黒島、網走港、紋別港、音標ゴメ島、浜中町霧多布周辺、釧路周辺、根室落石漁港、本州では青森県大間弁天島や陸奥弁天島がある。そのほか北海道沿岸や東北沿岸に繁殖地が散在するが、いずれも営巣規模は数巣～数十巣と多くはない。

【生息地の現況】

北海道における主要な営巣地の環境に大きな変化はない。近年、それまでに営巣が確認

されていなかった漁港の防波堤上や周辺の建物屋上などに営巣が見られるようになって
いる。

【個体数の現況】

北海道における主要な繁殖地の多くで、個体数が急減している。知床半島では 2000 年
代に 1500 巣程度の繁殖があったが 2010 年代には半減し、2020 年には 325 巣にまで減少
した。大黒島では 1997 年には 160 巣（調査区画内）の繁殖があったが 2000 年代に半減し、
2021 年にはわずか 1 巣が確認されているのみである。モユルリ島では 1990 年代に最大 223
巣（調査区画内）が記録されたが 2000 年代以降激減し、2022 年にはわずか 22 巣になっ
た。ユルリ島では 2007 年に 230 巣（調査区画内）を記録したが以降激減し、2022 年はわ
ずか 9 巣になった。天売島では 1990 年代から 2000 年代にかけて 1000 巣程度の繁殖があ
ったが、以降減少して 2010 年代には 150～500 巣程度に推移した。利尻島では 2000 年代
に 300～550 程度の営巣があったが、2010 年代以降は 140～300 程度に減少した。釧路周辺
では 1990 年代に 130 巣程度繁殖があったが 2016 年には 32 巣に減少した。一方、礼文島
トド島では 2018 年に 428 巣、根室落石漁港で 2019 年に 279 巣、網走港では 2013 年に 493
巣、同年紋別港で 336 巣、霧多布周辺で 2010 年代に 330 巣程度の繁殖が確認されるなど、
漁港などで比較的大規模な繁殖が新たに確認されている。

存続を脅かす要因

イエネコやドブネズミによる捕食と攪乱、カラスによる卵や雛の捕食、およびオジロワ
シによる捕食や攪乱が確認されている。オジロワシによる捕食の影響程度は不明である
が、本種の繁殖地にオジロワシが長時間滞在することで親鳥が営巣や繁殖を放棄した事例
は確認されている。餌となりうるホッケやイワシ類、イカナゴ等の魚類、あるいは投棄魚
の減少なども考えられる。地域によっては人間による巣や卵の採集や撤去がなされている
ほか、繁殖地への立ち入りによる営巣の妨害も生じている。

要因の区分：	（過去）	捕食（外来種による）、捕食（在来種による）、その他（人間による 巣や卵の撤去、営巣の妨害）、不明
	（現在）	捕食（外来種による）、捕食（在来種による）、違法採集、その他 （人間による巣や卵の撤去、営巣の妨害）、不明

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	オオセグロカモメ	<i>Larus schistisagus</i>	NT
第4次 2019:	—	—	—
第4次 2018:	—	—	—

第4次 2017:	—	—	—
第4次 2015:	—	—	—
第4次:	—	—	—
第3次:	—	—	—
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和6年度末時点）

【北海道】準絶滅危惧(Nt), 【岩手県】留意, 【愛知県】準絶滅危惧(NT)(越冬), 【岡山県】準絶滅危惧, 【長崎県】情報不足(DD), 【熊本県】情報不足(DD), 【大分県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和7年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- 長谷部真, 2015. 北海道北西部の港におけるオオセグロカモメの人工物上での巣数. 利尻研究, 34: 33-35.
- 環境省自然環境局生物多様性センター, 2015. 重要生態系監視地域モニタリング推進事業（モニタリングサイト 1000）海鳥調査 第2期とりまとめ 報告書. 環境省, 富士吉田.
- 環境省自然環境局生物多様性センター, 2023. 2022年度モニタリングサイト 1000 小島嶼（海鳥）調査報告書. 環境省, 富士吉田.
- 環境省自然環境局生物多様性センター, 海鳥コロニーデータベース.
<http://www.sizenken.biodic.go.jp/seabirds/>
- Olsen, K. M. and H. Larsson, 2004. Gulls of Europe, Asia and North America (Helm Identification Guides), pp. 349-362. Helm, London.
- 佐藤文男, 2022. 日本の海鳥の現状と保全の課題—環境省モニタリングサイト 1000 海鳥調査から—. 山階鳥類学雑誌, 54: 3-53.
- Senzaki, M., A. Terui, N. Tomita, F. Sato, Y. Fukuda, Y. Kataoka and Y. Watanuki, 2019. Long-term declines in common breeding seabirds in Japan. Bird Conservation International, doi:10.1017/S0959270919000352.
- 渡辺義昭, 2020. 北海道オホーツク海沿岸における 2013 年の海鳥営巣数と 2014 年から 2019 年までのオオセグロカモメの営巣数増加. 利尻研究, 39: 27-31.
- 矢萩樹, 2016. 釧路市の港におけるオオセグロカモメの営巣状況. 釧路市立博物館紀要, 36: 31-34.
- 矢萩樹・貞國利夫, 2017. 釧路海岸における海鳥の繁殖記録. 釧路市立博物館紀要, 37: 45-48.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Larus schistisagus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Larus schistisagus* is listed as EN under criteria A2.

A. Reduction in population size based on any of the following:

2. An observed, estimated, inferred or suspected population size reduction of $\geq 50\%$ over the last 10 years or three generations, whichever is the longer, where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】 Farmland, Wetland, Lower river basin, Estuary, Reservoir/Pond, Sandy beach/Pebble beach, Sea Cliff/Rocky beach/Reef, Brackish water, Salt marsh/Intertidal mudflat (including mangrove wetland), Lagoon/Brackish lake, Anchialine pool/Anchialine cave 【Marine area (Coastal area)_Intertidal zone, Surface water】 Sea surface, Intertidal mudflat 【Marine area (Open sea)_Surface water】 Sea surface
Threat types:	Predation (by alien species), Predation (by native species), Illegal harvesting of biological resources, Other, Unknown
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



©風間健太郎 (早稲田大学)



©風間健太郎 (早稲田大学)

執筆者: 風間健太郎 (早稲田大学)
Author: Kentaro Kazama

公表年月: 2026 年 3 月